

観能のいざない

狂言 水掛髯 (みずかけむこ)

髯(むこ)が自分の田へ行ってみると、なみなみと入っていたはずの水がない。隣の舅(しゅうと)の田に水がすべて流れてしまっているのに気付き、堰(せき)を切って自分の田に水が流れるようにして、他の田の様子を見に行く。やがて舅が田に行ってみると、水がない。隣の髯の田に水が流れてしまっているのに気付き、再び堰を作り見張っていると、髯が戻ってくる。世間話をしているうちに、髯は、再び自分の田の水がなくなっているのに気付き口論になる。やがて水をかけあたり泥をぬりあったり争ううちに、妻が気付いて現れる。舅も髯も、それぞれ自分に味方するよう妻に訴えるが、最後は髯につき、夫婦で舅を転ばせて帰っていく。

日照りが続いたこともありどちらかに水を引けばどちらかに水が入らない、農民の水争いを描いた狂言。舅と髯が争う様子が笑いを誘う。

能 黒塚 (くろづか)

那智の東光坊祐慶が登場し、諸国をめぐる途中、奥州安達が原に着いたところであると名乗る。日が暮れてきたので宿をどうしようかと思っていると、人里もない山中に灯りが見えるので泊めてもらうことにする。

舞台上に据えられた柴屋の引廻(ひきまわし)が下ろされ、主の女性が姿を現す。祐慶が宿を頼むと、自分一人でさえ住みかねるわびしい住まいですからと断るが、他に泊まるところもないからと懇願され、宿を貸すことにする。

女は、卑しい身の業と恥ずかしく思いながら、僧の請いにより梓枳輪(わくかせわ)という糸を巻き取る道具を扱う様を見せ、あさましい身の上を嘆く。夜も更けて寒くなってきたので、薪を取ってこようと言う。その間、決して閨(ねや・寝所)の内を覗かないようにと重ねて言って出ていく。

女が出て行ったあと、祐慶が寝ている隙に、能力が女の閨を覗くと、人の死体が積まれ、見るもおぞましい有様であった。さては安達が原の鬼女の棲家であったか祐慶一行は急いで逃げようとするが、女が鬼女の姿となって追いかけてくる。僧たちが懸命に祈ると、やがて力も弱り、姿も見えなくなってしまった。

安達が原に住む鬼女の物語。主の女は祐慶の求めに応じて宿を貸し、祐慶のために薪を取りに行く。見るなど言われると見たくなるのが人の心で、閨の内を見ないよう言われたにも関わらず能力は中を覗いてしまう。こうした人間臭い役柄は狂言方が担当する。恐ろしくなって逃げる祐慶たちの前に、鬼女は、「隠していた閨の内を見られた恨みのために来た」といって現れる。果たして女は初めから祐慶一行をとって食べるつもりだったのか、あるいは閨を覗かなければ無事に帰ることができたのか。本曲で描かれる鬼女は、ただ恐ろしいというわけではなく、どこか哀れさを漂わせている。

(宝生流職分 佐野玄宜)